



Title	「女性問題」と「イスラム」：サイド・アフメド・モハメドの視点
Author(s)	竹村, 景子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 1994, 5, p. 46-62
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/71079">https://doi.org/10.18910/71079</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「女性問題」と「イスラム」

— サイド・アフメド・モハメドの視点 —

竹村 景子

### I. はじめに

タンザニアのザンジバル出身で、一切の文学作品をスワヒリ語で書いている作家、サイド・アフメド・モハメドの最新長編小説『アスミニの苦悩』(Tata za Asumini, 1990, Longman Kenya Ltd.)では、現代社会が抱える数多くの矛盾が描かれている。その中で、とりわけ著者が強調したかったと思えるのは、「イスラム」という名のもとに女性に強いられる様々な差別が、いかに女性の精神生活を破壊していくかということである。

本作品を選んだ理由としては、男性作家が「女性問題」をどのように取り扱っているのかを、詳細にわたって考察する必要性を感じたというのが挙げられよう。同じタンザニア出身の女性作家、ペニナ・ムハンド<sup>1)</sup>は、ある対談の中で、「女性作家が女性問題に取り組まねばと言う意見があるが、それについてはどう考えているか？」という質問に対して、「男性作家が女性問題を取り上げてくれないから、私たち女性が書くしかない」と答えている<sup>2)</sup>。女性を主人公にしたものは、スワヒリ語の男性作家によってこれまでも色々と書かれてきた。しかし、現実の「女性問題」を深くえぐるような作品が見られるかどうかは別問題であり、描き方がステレオタイプ化されたものになっているという指摘もある<sup>3)</sup>。このことは、「イスラム」を根底に抱え込んでいるアラブ世界でも全く同様のようであり、エジプトの女性作家、ナワル・エル・サーダウィは次のように述べている。

従って、アラブ人作家たちは、父権制度によって制度化された女の分類法を踏襲したと言える。というのは、この制度では、女は、純粹で聖なる母と不感症で貞淑で立派な妻という部類か、熱くて、脈動し、魅惑的だがさげすまれた女である売春婦や愛人という部類、のどちらかに属することになっているからだ。<sup>4)</sup>

過去、現在を問わず、アラブの作家たちは、女たちの人生における性的・精神的な悲劇の核心にはいり込むことはできなかった。それ故に、主題にみあったことは何も表現できなかったのである。<sup>5)</sup>

そこで、本稿の目的は、長きにわたって「イスラム」の影響を多大に受けてきた、スワヒリ社会に生きる一男性作家が、現代の「女性問題」と「イスラム」の因習との関係をどのように捉えているのかを、明らかにすることである。

## II. 作品の概略

### a. 主要登場人物

アスミニ：本編の主人公。幼少の頃から、両親によって、イスラムの教えと称した過度な「女性の性」や「性交渉」に対する抑圧的教育を受け、自らを解放することができなくなってしまった女性。自らが課した精神的抑圧と環境の変化から受けた様々な肉体的、精神的打撃により、最後には精神障害を引き起こして自殺してしまう。

ミリアム：アスミニの大学寮でのルームメイト。パトロンを持ち、いつも贅沢な生活をしている。アスミニのことは、何とか自分が精神的抑圧から解放してやりたいと何かと面倒を見るが、結局はうまくいかない。大学卒業後は、全国女性同盟の中央委員となり、ある会合でアスミニと再会する。

セウ：大学時代、自殺しようとしたアスミニをミリアムと一緒に助ける。初めて飛行機の中で出会った時から、アスミニのことを愛していたが、アスミニには受け入れてもらえない。アスミニが退学してから、外国に留学し、卒業後は精神科の医者になる。精神障害を引き起こしたアスミニと、医者と患者という立場で再会する。

ザイナ：アスミニの幼なじみ。少し年が上であることから、アスミニのことを小さい時からよく面倒を見てくれていた。大学を飛び出したアスミニが、村にも帰らず空港でうろうろしていた時にぼったりと出会い、そのまま自分の住む長屋に連れていく。段々と精神に異常をきたしていくアスミニを助けようとするが、どうすることもできない。本当は、アスミニとは母親の違う実の姉妹である。

ムケジェル：妻を持ちながら、大学生のミリアムのパトロンとして、いつかは若いミリアムを自分の妻にしたいと考えている。大学を飛び出して小さな町で暮らしていたアスミニのことを知り、その美貌に狂って、今度はアスミニも自分のものにしようとするが失敗する。全国女性同盟の中央委員となったミリアムと結婚する。

ジャズメ：アスミニの幼なじみ。田舎の村で、小さい時はいつも二人で遊んでいた。アスミニが都会の大学に行ってしまったからしばらくして、村の様子はすっかり変わり、ジャズメ自身も年齢よりもずっとふけて見えるほどに疲れ果てていた。久しぶりに村に帰

ったアスミニと再会するが、自分の気持ちをコントロールできなくなったアスミニの突如の行動を、受け入れることができずに逃げてしまう。

b. 主人公の動き

- A (村社会=イスラム色の強い伝統的社会) …ペンバのある地方
- B (大学生活=西欧近代文明を抱え込む大都市社会) …ダルエスサラーム
- C (町=大都市ほどには西欧化は進んでいない, AとBの性格を併せ持つような社会)  
…ザンジバルタウン

c. 提起されている矛盾、問題についてのキーワード

- A: イスラムの教えに基づく家父長制(=Ubaba)、牧歌的世界という幻想
- B: 大学に通うエリートたち(Msomi/Wasomi)、全国女性同盟の表と裏、  
タクシー運転手のつぶやき
- C: 売春婦、イスラム教徒(特に、'Shekhe'や'Kadhi'と呼ばれる聖職者たち)の表と裏

d. 主人公が死に至るまで

- Aにおける抑圧的教育=Aの価値観の絶対的正当化…非常にナイーブでセンシティブな人格形成
- Bに向かうことへの不安…従来、希望や未来の象徴であった都市に対する疑惑
- Bの価値観をあくまで拒否する自分と理解しようとする自分との対立…大きなジレンマによる精神的抑圧 ∴精神的アンバランス
- Aの価値観を否定せざるをえない事実との直面…理想的世界と現実のギャップ
- AとBの価値観の板ばさみ…どちらにも居場所が見つけれられない=自己のアイデンティティの喪失 ∴自己崩壊

Ⅲ. 登場人物の言動に見る著者の問題提起及び主人公の心の動き

[第1章]「大学生活=都市生活」に対する拒否反応→自己破綻→自殺を試みる

[…]天にも届くようなあの建物を、みんなは「レジデンスホール」と呼んでいるけれど、アスミニは「驚愕の塔」と呼んでいた。そこには、外国からもたらされた現代的教育の秘密が隠されているのだ。その教育は、しっかりと学生たちの頭の中に植えつけられている。  
明日になれば、きっと親を助けると思われている学生たちの頭に、だ。(p.2)

[…]何度もクリニックに行ったことがあったが、いつも薬はなかった。その少し上には食

堂があった。そこでは毎日、学生と教官たちが先を争ってトレーを取り合っていた。[…]  
後ろを振り返り、メンテナンス棟を見ながら、この国がどれほどメンテナンスということ  
を蔑ろにしているかを考えた。何もかもボロボロなのだ。電話も、道も、水道も、橋も、  
工場も。一体、修理工はどこにいると言うのか。(pp.5~6)

〔第2章〕自殺の失敗「現在の自分と過去の自分＝都市社会にいる自分と伝統社会にいた  
自分」の定義付け・・・生き立ちの描写

アスミニの心の中には難解な謎が隠されていて、ミリアムは何度もそれを解こうとした。  
多分、一生懸命アスミニと接しているうちに、必ず答えが見つかる日が来ると、ミリアム  
は思っていたのだが、一向にアスミニの心の中はわからないのだった。(p.11)

アスミニがその小さなパンツを脱ぐと、父親はものすごい勢いで怒った。「お前、何をし  
てるんだ、馬鹿なことするんじゃない。早くズボンをはかないか！ 人に見られでもした  
らどうするんだ。」[…]またある時に、上着を着ないままで外に出ると、母親は優しい声  
でアスミニを呼んで言った。「早くこっちへ来て上着を着ましょうね。お父さんに乳首を  
見られたらたたかれちゃうからね。」アスミニは、近所の子供たちのように、パンツ一枚  
で走り回ったり川で泳いだり、雨の中で遊んだりする自由を自分が奪われてしまう憤けな  
さで、悔しくて泣いた。(p.18)

このはかない生き物の心は、常に清くあるように望まれていた。だが、その外側では、世  
間は汚れ、悪臭が漂うほどなのだ。それは、アスミニが生きている世間であり、誰もが生  
きている世間でもあった。なのに、両親は彼女だけを清めようと必死だった。(p.20)

〔第3章〕自己変革への試み1：アスミニは殻に閉じこもるのを止めて、外界を知るため  
に友達と一緒にディスコに行こうと決心する。

〔第4章〕自己変革への試み2

その時、アスミニの頭の中にはムワンボジェのことが浮かんだ。1年間共に学んだこの友  
人は、敬虔な信者であったが、くるぶしまで届くカンズも、長袖のカンズも、胸にウシェ  
ンギの付いたカンズ<sup>6)</sup>も、とにかく一切着るのを拒んでいた。だが、モスクからは決して  
いい加減な気持ちで出てきたりしないのだった。ある日、2人で話をしている時に、ムワ  
ンボジェはアスミニにはっきりと言った。「神は、ご自分が遣わされた人間のことは、ご  
自分の心の中で何もかもお見通しさ....信仰するってことは、朝から晩まですっぽり体を  
覆っていることなんかじゃなくて、その人がどういう行動をするかってことなんだよ。」

「神は命じられたのよ、女性はね....」アスミニは言いかけたが、ムワンボジェはそれを

遮って、「神は我々に身を覆い隠すことを命じられたよ。だけど、身を隠す方法については、人それぞれが個別の解釈ができるし、だから、人それぞれに合う衣服が着られるんだよ....いいかい、アスミニ、僕たちの先祖は、ずっと昔から信仰しながら生きてきて、その衣服と言え、カニキのような仕事着<sup>7)</sup>やごく普通のカンズだったんだ。ズボンをはいたことだってあるし、テイテイのような幅広ズボン<sup>8)</sup>を着たこともあった。今でもブイブイ<sup>9)</sup>を着てるじゃないか....君の考え方だと、こういう先祖たちは、死んでからみんな地獄に落ちちゃったことになると思うんだけどな。[...]

(p.51)

あんたらみたいな、勉強しとる人たちにわしなんかは何を言ったらいいかわからんが....けど、あんたら若いもんはわかっとるだろうが、あんたらはわしらなんかより、よっぽど楽しい世界に生きとるんだ。[...]今の若いもんは、ただで大学まで行かせてもらって、その後はちゃんと給料のもらえる職に就く。そんなことはわしらの時代にはなかったさ。勉強を終えたら、せいぜい一生懸命働いて、わしらの国を盛り上げてくれんな。 (pp.52~53)

「[...]人間だって変わったのさ。人間の心は、今日は昨日よりも残酷になった。生活が変わっちゃった。今日は昨日より苦しいよ。着るもんだって変わっただろう。昨日はミディだったかと思えば今日はロングだ。今じゃずるずる引きずってるのだっているだろう。」  
[...]「例えばわしを見てみる。朝から晩まで働いて、一体何を求めてるってんだ？ 果てしないわしの妻の物欲を癒すためだけじゃないか。今日はこれ、明日はこれ、今日はこのファッション、明日はあのファッション。どうすりゃいいのかねえ、ほんとに。」  
「奥さんだって、あなたのために家事をしてくれているでしょう。炊事、洗濯、買物、子育て、それにもし田舎に住んでたら、農作業や水汲みや薪拾いだってしてるわ....」アスミニが答えた。(pp.53~54)

【第5章】自己変革への試み3 → 挫折 → 現実逃避：ディスコで酔っ払いにからまれ、狂人のようにそこを飛び出したアスミニは、やはり自分はこの世界には住めないと、街を出る。だが、故郷へも帰れず、幼なじみのザイナのところへ身を寄せせる。

【第6章】交錯する現実1

「じゃあ、女はどうなんだい？」運転手が尋ねた。「女は昔っから悪魔よ。あなたたちがそう言ってるんじゃないの？ けど、忘れないでよね。悪魔はいけにえを求めるものなのよ。それも、丸々と太ったのをね！」(p.67)

「[...]男が何を欲しがってるか、みんなわかってないのよ。最近の男は、結婚を望んでなんかいないわ。結婚したら、その後悔はみんな女の上に降りかかることになってるのよ。」

(p.67)

「私は自分で自分のことをこう思うことがあるの....」アスミニは意図して続けた。「自分が一人きりで自分だけの世界に生きているの。そこは高潔という夢で一杯なのよ。そして、そこは外の汚れた現実から逃避しているところなの。」(p.70)

「[...]男を食い物にしたり、騙したり、男にのめり込んでダメになる女のこと、聞いたことあるわ....」[...]アスミニは自分を確認した。なぜあんなことを尋ねたのだろう？ 多分、人の金をたくさん使い込んだから。じゃあ、なぜ人の金を使ったのだろう？ みんなから移された病気を癒すため——そう、欲望という病気を。[...]自分の意識の遠いところでは、アスミニは男性を憎み、復讐を誓っていた。だが、彼らを罪の淵から出してやることもあったのだ。[...]「何の復讐なんだろう？ 彼らが私に何をしたと言うんだろうか？ [...]どうやったら自分を守れるのだろうか？ [...]男がみんな悪魔だと信じればいいのか？」アスミニは自問した。女が、男の家に連れ立って行き、何事もなくちゃんと戻って来られるかどうかということ。自分で試してみたかった。(pp.75~76)

[...]大学では、アスミニははっきりと「何々主義」という講義を聞いてきた。それは、言葉の上では女性の権利を認めるものだった。今でも、あの瘦せて、けれども広い心の持ち主であった男性講師が語ったことを、アスミニは頭の中で反芻することができた。「女性は、身体的には男性といくつか違いはあります。しかし、他は男性と全く同じなのです。我々の社会は、女性を低い地位に押しとどめ、権利を奪い、ただ快樂のための道具、生活をしていくのに必要な道具、あるいは金持ちになるために使う道具としてしまっていることで、大きな可能性と力を失っているのです....女性は、どんな事でも、男性ができる事ならできるんです。それに、ある場合には女性の方がよくできることもあるんです....」

(pp.76~77)

## [第7章] 交錯する現実2 → 自己嫌悪

「[...]その家の中にはね、オマリと呼ばれる人がいたのよ。大変尊敬を集めている人でね、そんな敬虔な信者は他にはいなかったもんだった。考えてみておくれよ、そんな年になるまで、オマリは結婚してなかったんだよ。結婚はイスラムでは自由意志に任せられてるけれども、オマリは、自分の人生は全て神に捧げると言っていたんだ。[...]ある日の早朝、あたしは誰かが胸を手で触っているのに気が付いて、飛び起きたのさ....」[...]「悲鳴をあ

げたかったんだけどね。」ティメは続けた。「あいつはあたしの口を塞ぐと、自分の唇に人差し指を当てて、「シーッ!」と言ったんだ。それで、10シリング札を出してあたしの胸の上に置くと、誰にも言うなと言ったのさ。」[…][…]「そういうやからは、信仰するってことは、1日に5回お祈りするだけとか、断食月には断食するとか、そんなことだと思ってるけど、やつらがやってないことで重要なことは他にもたくさんあるのにねえ。」[…][…]「けどね、10シリングは当時大金だったんだよ。なんだか母親がかわいそうになってねえ。1日中かゆを作って売ったところで、そんな金にはならなかった。」[…]

(pp.79~80)

「ムケジェルですが。」遠くで乾いた声が答えた。「アスミニです。」「どうして家になんか電話してきたんだね？ 家には電話しないようにと言っておいただろう？」「迎えに来て下さらない？ セロにいるの。ここで待ってるわ。」そうたたないうちに、黒いベンツがやって来て、アスミニの目の前で止まった。そしてもう次の瞬間には、アスミニはベンツの中でダディ、つまりムケジェルと話をしていた。「あなた、臆病者なのね？」アスミニはからかった。「何を怖がってるというんだね？」[…][…]「お宅に電話した時、震えていたじゃないの。奥様が怖いんでしょ。もう少しで、もう結構よって言うところだったわ。でも、大目に見て差し上げたけれどね。力も富も時間もあるのに、おかわいそうに....」[…][…]「いいかい、妻なんてものはね、子供と一緒に作って、ちょっと敬意を払っておくだけのもので、怖がるもんじゃないんだよ....それに、」ムケジェルは、この会話の流れを一気に妻の話からアスミニと自分の2人のことに変えてしまおうと、言葉を続けることにした。「私は、いつかきっと運が巡って来るとわかっていたんだよ。そして、とうとう巡って来た。ああ、神の御名を讃えん。」アスミニはこれを聞いて驚いた。こんなことまで神に感謝することなのだろうか、と。(p.93)

#### 【第8章】自己嫌悪からの脱却の糸口

どうして社会は女だけを監視するのだろうか？ どうして女だけが悪魔にならなければならないのだろうか？ どうしてムケジェルは悪魔にはならない？ (p.101)

#### 【第9章】真実を凝視する力

「結婚なんて、大したことじゃないわ。」アスミニは答えた。「男の人は、まるでシャツを着替えるみたいに女を取り替えるもの。」3人は笑った。「確かにそうね。」笑いが収まると、ミリアムが答えた。「この人だって、私と結婚するために奥さんと別れるはめになったんだから。」「何を考えてるんだ、お前は。」ムケジェルは恥ずかし気もなく笑い

ながら言った。「人間はね、利益を追及するものなのだよ。ミリアムはエリートだし、地位も美しさもある女性だ。どこを取って比べようたって....」 「ねえ、聞いた？ 全く男ときたら。」ミリアムはからかって言った。「美しさは二の次なんだから。地位がまず大事なのよ。それが、この人たちにとって、利益の重要な要素なんですって。私、今でもこの人が、愛情から私と結婚したのか、それとも私の地位や教養やお金と結婚したのか、わからないのよ。」 「全てだよ。」ムケジェルは考えずに言葉を発した。「愛情は、地位と金の上に成り立つものなのだよ。」 (p.115)

ムケジェルを観察し終えると、アスミニはミリアムに移った。特に、様々なワークショップやセミナーで見せた、彼女の知性と、そこでの鋭い発言について考えた。だが、どうだろう。その場にいるミリアムは、まるで落ち着いてしまっていて、親たちが望まないような曇りや霧り、汚濁は、一切濃過されてなくなった、水瓶の中の冷たい清水のようだった。あのワークショップやセミナーは、単なる子供の遊びでしかなかった。[...]彼女は、自分が望み、自分が選んだ人生を歩んでいる。夫であり、同志であり、彼女の望む幸福と喜びを完全なものにしてくれる男、ムケジェルと共につかんだ人生を歩んでいるのだ。 (p.119)

#### [第10章] 帰郷 — 信じていたものの崩壊 → 更なる自己嫌悪

アスミニは市場のあるところで降りた。そこは、人間と、ひしめき合う小屋とバラック建てで溢れかえっていた。[...]アスミニは知った顔を探そうときよろきよろしてみたが、みんなわからなかった。また、彼らにとっても、アスミニは知らない顔だった。アスミニは、茫然と取り残された。どこへ行ったらいいのかわからなかった。どこへ向かうべきなのかも、見当がつかなかった。カロンガは大きな村になってしまっていた。村は、広がってしまっていた。 (p.129)

#### [第11章] 精神の崩壊 → 誤った自己解放？

「なぜって、みんな汚いからよ！ なのに誰もが自分はきれいなふりをしているじゃない。私は絶対に汚れた兄弟なんかいらんよ！」 (p.141)

「[...]私、あなたのお父さんと私の母がもめているのを聞いてしまったの。しまいには、母の堪忍袋の緒が切れて、あなたのお父さんを罵り始めたわ....もう何年経つんですか...母が言ったわ....あなたはいつもいつも本当のことを隠してばかりで....ザイナはもう大きくなって、私たちはこんなになってしまった。もし明日にでも私たちが死ねば、あなたはあの子の権利なんて無視するんだわ。私は、私の子の権利を無駄にしないためにも、もう黙っていられますからね。[...]それで、私は、あなたのお父さんこそが、私の父なん

だって知ったのよ。[...]母に懇願して、遺産相続の権利書を書くから、秘密を守ってくれと頼んでいたわ。」アスミニにとっては、この荷は重すぎるものだった。自分を押さえることはできなかった。一体どうしたのかわからなかったが、アスミニはザイナに飛びかかり、首を絞めていた。[...]「この女はね、嘘を言ってるのよ。私の父を何の根拠もなしに侮辱するなんて！ 父は高潔な人だったわ、とても！ それを不潔呼ばわりするなんて... 壊してやる、引き裂いてやる、粉々にしてやるわ、この家のもの全て！ みんな汚いんだから!!」(pp.142~143)

#### 〔第12章〕正気と狂気の混在

どうして女性だけが、何もなくても不潔だと指を差されるのだろうか。どうして女性だけが従わせられるのだろうか。どうして自分は、こうしなさい、ああしてはだめと、強制されたのだろうか。[...]どうして婚姻における貞操観念は母親だけに強要されて、父親はソトに内緒の家を持てたのだろうか。(pp.151~152)

#### 〔第13章〕最後まで誰にも解放できなかった苦惱＝アスミニ自身→死→魂の解放

「[...]あなたの娘は、絶対きちんと育ててね。この世の中の、生きていく上での真実を語って聞かせてね。世の中にある、畏や、彼女を取り巻く危険を教えてね。でも、どうか真の危険を。私が小さい頃から何度も聞かされたような、男性は危険だ、というようなことじゃなく。娘に教えてちょうだい。この世は、誰にとっても戦場なんだって。男も女も同等に闘う場なんだって。娘に自由を与えてやって。この世をよく観察し、認識し、彼女が決めたように生きていけるように...でも、それ以上に、娘にはこう言ってやって欲しいの。私や、他の多くの人々を破壊したように、彼女を破壊してしまうかもしれない、暴力的な心理的抑圧と闘うように、と。[...]さようなら、セワ。私たちの子供たち(あなたの子供は私の子供でもあるから)は、きっと自分たちで今よりずっと美しい世界を創るわ。私たちにはできなかったけど！ 本当にごめんなさい...」(p.171)

(引用文中の下線は筆者によるもの)

#### IV. 考察

本作品の舞台は、いわゆるスワヒリコーストと呼ばれる地域の、異なる3地点である。具体的な地名が語られているのは、Aのカロンガ(Karonga)というペンバ島に実在する地名を借りたものだけである。残りの2地点については、文脈や描写から筆者が解釈したものである。サイドは、フラッシュバックなどの技法を用いながら、主人公のアスミニがA

→B→Cという移動をする中で、どのような人々と出会い、どのような影響を受け、どのように死に至ったかを描いた。

アスミニが動いた3地点を、彼女が経験した様々な精神的抑圧、また、彼女や他の登場人物を通して語られる社会矛盾とを絡めて分析してみる。

Aの‘Ubaba’という語は、「父性、父権」といった意味になるが、幼少の頃からアスミニの精神的抑圧の原因、自己解放疎外の原因になっているものである。つまり、イスラムという名のもとに、女性に対して男性——この場合は父親と、父親には決して逆らうことのない母親——が、他の価値観、もしくは現実を認める能力の発展を著しく遅らせてしまう育て方をしたと描かれている。父権制社会における父親の存在は絶対で、娘はおろか、母親すら逆らうことはできない。第2章での引用文にあるように、アスミニは自分だけが他の子供たちのような自由を与えられないことに対して、一度は疑問と悔しさの念を抱いている。しかし、その疑問は、度重なる両親からの厳しい「イスラムの教え」によって掻き消されてしまうのである<sup>10)</sup>。タンザニアの実際的な問題として、この父権制社会／家父長制社会における婚姻の歪みは既に指摘されてきた。1971年の婚姻法の制定の結果、未亡人は遺産相続のために夫の兄弟と結婚させられることを拒否したり、もしくは離婚したりすると、子供の養育権は剥奪されることになったが、それについて、都市に住む女性たちは非常な反発を見せ、この家父長制的婚姻形態を完全に否定している人もいる。しかし、究極的には、国家自体が法制度や裁判を通して、女性を「母性」として定義するよう指導してきたのであり、女性は従属的で、婚資を媒介にして交換可能な日用品であり、その存在自体を男性に依存するものと考えられてきたのである<sup>11)</sup>。

また、牧歌的世界である、もしくは、都市に出て挫折した時には、結局は帰り着く場として語られることの多かった伝統社会ではあるが、実際には都市化の流れの中で影響を受けないなどということは決してなく、経済的な部分をはじめとして、変容せざるを得ないことを指摘し、その変容の中でも犠牲になっているのは多くが女性であることを明らかにしている。アスミニが紆余曲折を経て故郷に帰った時、出会う女性全てが多くの生活苦に苛まれているというシーンが出てくる。このシーンは、家計を保ちながら、酒や女に金をかける夫の浪費を考えねばならなかったり、夫やその親戚にも従順で、十分な世話をしなければならなかったり、暴力に耐えながら家事全般を引き受けねばならない、都市及び農村の多くの女性たち<sup>12)</sup>の、現実の姿をほんの少し映し出したものであろう。

Bでは、まず‘Msomi/Wasomi’という、いわゆる「エリート」と訳される語に注目してみ

る。アスミニも含めて、大学に通う若者たちや、ムケジェルのような富裕層の者は、都市という近代文明を抱える世界で、その全てを享受できる立場にいる。そして、このような社会の最上層にいる人間が、どれほど富と快楽を満喫しているかということ、最下層にいる人間は鋭い目で眺めているのである。アスミニたち4人がタクシーに乗ってディスコに行くシーン(第4章)では、タクシードライバーのつぶやきによって、見事にこの事実を明らかにする。しかし同時に、その最下層の人間よりも更に「下」に位置付けられる女性の姿が見えてくる。タクシードライバーは、女性同盟の運動が活発になり始め、自分の妻が色々な要求をするようになったことについて愚痴をこぼす。アスミニに、女も家でどれほど苦勞しているか考えてみるようたしなめられても、くだらない冗談でしかかわせない。ここにも、やはり「女は家に縛り付けておくもので、従順でバカな生き物」という考え方が存在している。AとBでは、全体的に見れば価値観の違いが存在するように思えるのに、「女」については全く同様の矛盾を抱えていることが指摘されるのである。

ただ、それと並行して描かれているのは、「女」の中の問題点である。アスミニがミリアムと再会し、彼女をまじまじと観察するシーン、及び、「全国女性同盟」の在り方について議論するシーンが出てくるが(第9章)、ここではアスミニを通して、何不自由なく暮らしているであろう女たちの欺瞞性<sup>13)</sup>が問いかけられるのである。この「全国女性同盟」というのは、おそらく「タンザニア女性連合(UWT: United Women of Tanzania)」をモデルにしたのではないかとと思われるが、事実、1971年にこの組織に対して、労働者階級の女性たちから非難の声が上がったことがある。シングルマザーに対しても、有給の産後休暇を与えるかどうかの議論が持ち上がった時に、UWTはその権利を認める方向で話を進めなかった。それに対し、UWTは「ビッグワイフ」、つまり政党の要人や政府の官僚の妻たちから成る組織で、下層の女性の意見は全く反映されていないという批判が出されたのである<sup>14)</sup>。ここでは、女性が、その差別されている状況に対してまとまって声を上げなければならない時に、本来なら、先頭に立つべき地位と力を持った者たちが、実は、男性本位の価値観の中で毒されてしまっている、もしくは、当初の目的を忘れてしまっているということ、2人の女性の会話の中で明らかにしているのである。

Cでは、アスミニが身を寄せた、幼なじみのザイナの住む長屋でのことが中心に描かれている。この長屋には、年齢の異なる女性たちが暮らしているが、各々、重苦しい過去を背負っていたり、つらい現実と闘っていたり、あるいは、抜け目なく狡猾に生きていたりする。だが、彼女たちは一様に虐げられている。下層に生きていること、女であることか

らもたらされる社会的圧迫がある。そして、彼女たちは声高には叫ばないが、毎日毎日を何とか生きていかねばならない中で、確実に、何故そのような状況が引き起こされているのかを、感じ取っている。それは、この長屋に住む長老的存在、ティメの、「何もかもつかまえられない。何もかも手に入れられない。私たちの知らない何かがあるんだよ。どうして私たちの住むこの世界は、こんなに墮落していったのかねえ。」(p.87)という言葉に集約されている。また、宗教としてのイスラムの根幹に関わる描写すら度々出てくる。‘Shekhe’という称号の付くムケジェルも、敬虔な信者であったはずのオマリも、性的欲望から決して逃れられずに、女性を単なる性の捌け口としてしか見ていない。しかもそれは、近代社会の諸価値と、イスラム文化を含めた伝統社会の諸価値が融合することにより、イスラムが、性的快楽を追求する「墮落した」西欧文明に飲み込まれたから起こったのではなく、もっとずっと以前から存在したことなのである<sup>15)</sup>。

先述のように、アスミニは最後には自殺してしまう。この自殺については、次のような解釈が可能であろうと思う。つまり、彼女が余りにもセンシティブで頭が良かったために、知ってしまった問題や矛盾に対して、正しい答えを見つけようとすればするほど精神的抑圧が大きくなり、自己の居場所が見つけられなくなってしまった結果であり、彼女が結局はとても弱い「女性」であったから、社会の矛盾全てに背を向けるには、死を選ぶしかなかった、という解釈である。いずれにしても、最後までアスミニは誰にも本心を打ち明けなかったし、表面上は変化していないという捉え方ができるだろう。しかし、「女性」としてどう生きればいいのか、イスラムの因習の中で自分がどれほど抑圧されてきたのか、そして他の多くの女性たちがどれほど抑圧されているのか、父親を含め、男性は如何に家父長制／父権制の中で擁護されているのか、彼女は全てわかっていたと描かれていたように思えてならない。事実、様々な経験と、色々な人々との接触により、段々と知識を蓄え、鋭敏になっていったはずではなかったか。だとすれば、彼女の選ぶ道は自殺ではなく、彼女を愛し、彼女もおそらく愛していたであろうセワと結婚し、その上で、これからの「女性」がどう生きて闘っていくのかを模索することだったのではないだろうか。彼女が自殺したことにより、確かに、イスラムの存在が女性に及ぼす悪影響を読み取ることはできたかも知れない。しかし、「自己の内面との葛藤を繰り返していくうちに、外面にも、ほとぼしる情熱と矛盾に対する怒りをあらわにする女性」として、結局は描けなかったのである。

## V. おわりに

サイドは、主人公アスミニを、非常に頭脳明晰でセンシティブな女性として描いた。精神障害を引き起こしてしまっても、彼女の神経は非常に鋭敏で、病んでいるのは仮の姿であって、実際は世の中の矛盾を客観的に捉えているかのようであった。この点については、少なくともこれまで描かれてきたステレオタイプな女性像とは異なっているように思える。

一方、Ⅲで挙げてきた著者の問題提起の中で見られるように、その取り上げたかった問題は、イスラムの因習の歪みや女性差別のこのみではなく、政治腐敗や階級闘争、伝統と近代の対立に至るまで、かなり広範囲に渡っている。その一つ一つは確かに非常に重要な問題であり、且つ、諸問題は必ず相互に多大な影響を与え合うか、もしくはいずれかの問題から別の問題が生まれるわけであるから、意図は理解できる。しかし、余りにも包括的に描こうとしているため、筆者が考えていたような、「女性問題」と「イスラム」がテーマであるとは言い切れなくなっている事実は否めない。

これまでの作品群から分析しても、人道主義的立場を取り、直接的にも比喩的にも、政治腐敗を告発、糾弾する姿勢を持っていることから、問題の中心を「女性差別」という枠から「人間差別」へと広げ、真の人間性とは何か、真の平等とは何かを問いかけるというのも、サイドの一つの目的であったかも知れない。ただ、「男」と「女」という枠を超えて「人間」を問う前に、厳然と存在する「女性差別」を表層的に扱うのではなく、主人公がその解決策を求めて力強く生き抜くといった描写で、ポジティブでアクティブなインパクトを持たせる必要があったのではないだろうか。

セフへの遺書の中で、「私や、他の多くの人々を破壊したように」というくだりがある。網掛けの部分の原文は、'wengine na wengine'であるが、果たして、この形容詞の前に隠された名詞は、'wanawake' = 「女性」なのか、それとも単に'watu' = 「人間」なのか、全体的な流れの中で判断することができなかった。この曖昧さが、サイドの視点の微妙なズレ——イスラムという文脈の中で、「女性」に課されたものを「人間」に課されたものに置き換えてしまっている——の表われだと感じた。

スワヒリ文学の中で、まだまだ「女性問題」を取り扱った作品は少なく、その意味では本作品は大きな意義を持っているだろう。今後、スワヒリ社会の中で、イスラムの因習も含めたあらゆる女性差別に対する関心がもっと深まり、男性作家も女性作家も、これまでのステレオタイプ化された、歪められた女性像ではなく、真の女性像を描き出して欲しい

と願っている。

#### 【付録：作家略歴】

1947年12月12日、現タンザニア領、ザンジバルに生まれる。小学校の高学年時から詩作を始め、ローカルのラジオ番組で作品を読んでもらうこともあった。本格的な長編小説の一作目は1977年に発表されたが、既に1972年からは短編小説を精力的に書いており、以後、これまでに書かれたものは百以上にものぼる。また、それらのほとんどはBBC等の放送局で紹介されている。戯曲も数作書いており、現在、スワヒリ語作家の中ではもっともアクティブな存在であると言えよう。作品のテーマは、多くの場合、政治腐敗、社会秩序の混乱、貧困、経済格差などであり、社会派作家と言われている。

〔主作品〕

#### 〈長編小説〉

『苦い蜜』 Asali Chungu, 1977, Shungwaya Publisher, Nairobi.

『決別』 Utengano, 1980, Longman, Nairobi.

『この世は枯れた木の如し』 Dunia Mti Mkavu, 1980, Longman, Nairobi.

『光の中の闇』 Kiza Katika Nuru, 1988, Oxford Univ. Press, Nairobi.

#### 〈戯曲〉

『御祓い』 Pungwa, 1988, Longman, Nairobi.

『影は生きている』 Kivuli Kinaishi, 1990, Oxford Univ. Press, Nairobi.

『アメジディ』 Amezidi, 1992, 大阪外国語大学スワヒリ語研究室.

#### 〈短編小説集〉

『こっちとあっち』 Hapa na Pale, 1979, Institute of Kiswahili and Foreign Languages. (共著)

『悪魔でもなければ狂人でもない』 Si Shetani Si Wazimu, 1985, Zanzibar Publishers.

#### 〈詩集〉

『あきらめないで』 'Sikate Tamaa, 1980, Longman, Nairobi.

『人生の深さ』 Kina cha Maisha, 1984, Longman, Nairobi.

【注】

1) 1948年3月3日、現在のタンザニアの内陸部、モロゴロの近くのキロサの生まれ。小、

中学校に在学中から演劇に興味を持ち、ダルエスサラーム大学に入学後は、演劇、教育学、言語学を学んだ。修士論文は、タンザニアの伝統演劇‘Ngoma’（ンゴマ）がテーマである。1982年からは、同大学演劇学科の主任教授を務めている。現在は結婚して（ムラマに姓が変わり）、二人の子持ちでもある。タンザニアでは社会派の著名な戯曲作家として認められている。

2) 詳しくは、James, 1990, pp.74～91参照。

3) Bertoncini, 1991を参照。

4) サーダウイ, 1988a, p.285.

5) 同掲書, p.286.

また、同書の中でサーダウイは、もっと視野を広げた場合でも同様のことが見えてくることを、辛辣な批評の形で述べている。

出身地や使用言語の別なく、私が読んだ西洋とアラブ世界の男性作家たちの中には、大昔から伝えられてきた女のイメージから解放されている者は一人もいない。たとえ彼らの多くが、人権や人間の価値や正義を熱烈に擁護し、あらゆる抑圧や暴虐に対して強く抗議したことで、どんなに有名であるとしてもである。トルストイは、あれだけの卓越した文学的才能を持ち、封建的・ブルジョワ的なロシア社会の諸悪を告発しておきながら、女について語るときには、これよりましなことは言えない。

「女は悪魔の道具である。だいたいにおいて女はほかである。その代わり、サタンは、女が自分の命令通りに行動するときには、自分の頭を女に貸してやる」(p.275)

6) 全てイスラム教徒の男性が着用する礼式用の服。(kanzu)

7) 腰に巻いたりして用いる布。普通は黒色で、仕事着や上っぱりとして使われる。(kankani)

8) 幅広のズボン型の服。(teitei)

9) 一般に、イスラム教徒の女性が外出時に普段着の上から着用する、頭からすっぽり覆うことのできる黒色の服。(buibui)

10) サーダウイは、このような状況を更に広く捉え、女性が現代社会の犠牲者であることを次のように表現している。

女たちは今や、一方では伝統・宗教・道徳上の教えを口先で説かれ、他方で

は、最小の時間で最大の利益を得ることを第一の目的とする政治的・経済的な既得権益占有層によって生活を侵略されるという挟み打ちに会い、矛盾の間で粉々に押し碎かれるからである。(1988a, p.101)

更に、「女性差別」や「女性蔑視」の問題を包括的に考えようとする上で、サーダウイの諸作品は非常に有効である。

11) Gabba, 1990, p.319を参照。

12) Gabba, 1990, p.319を参照。

13) この欺瞞に対して、サーダウイは同じ女性の立場から、次のように述べている。

私は、エジプト社会の最も富裕な階層の人々が集まるレセプションやパーティーで、女たちが互いに夫の名前で呼び合っているのを耳にして、皮肉を言っていた衝動に駆られた。[...]私の皮肉は、夫の名前を使っている女たちが官製の婦人組織の指導的人物たちであり、女性の権利と自由について人前で演説をしているということを知ったとき、いっそう辛辣なものとなった。

(1988a, p.164)

14) Gabba, 1990, p.318を参照。

15) イスラムにおける「性」や「愛」に関しての、次のサーダウイの論点は非常に注目値する。

男にとって一夫多妻とは、性欲を満足させることを意味している。数人の妻を持ち、自分の経済的貪欲と肉欲を満たすという男の権利を強化するためには、宗教の支持が必要だった。また、父系による血統関係を確認、強化し、遺産相続が父親の息子によって行なわれるようにするために、女には単婚が求められた。そのために、男が経済的にも性的にも女を所有することを公認する一連の価値が定められ、正当化されねばならなかった。ここでもまた、宗教が役に立った。(1988a, p.196)

イスラムが愛と性、両性間の関係を肯定的にとらえた点は、私の知る限りでは、正当に評価され、それに値するだけの考慮を払われたことはない。それでも、イスラム社会に固有の矛盾した面が、それとは正反対のもう一つの傾向として表われている。その傾向は、性についてのユダヤ教とキリスト教の概念と実践を支配する、硬直し、反動的で保守的な考え方を引き継いだものであり、イスラムの教理を貫いている。イスラムは、女の体はサタンの住み

処であり、女はサタンの親密な従者ないし道具であるという、イヴと女たちの古いイメージを踏襲した。(1988a, p.237)

また、一夫多妻の問題を取り扱ったスワヒリ語の作品で、Machozi ya Mwanamke(『女の涙』)は、1975年が国連により「国際婦人年」と定められたことをきっかけに、女性の救済とは一体何なのか、真の女性の解放とは何なのかを問いかけることを目的として書かれたもので、農村の、いわゆる伝統的家父長制社会の歪みを告発している。

#### 【参考文献】

- Bertoncini, E. 1991. 'Women Characters in Swahili Literature', in 17th Annual Conference on African Literature Association, Loyola, New Orleans, March 20-23, 1991.
- . 1993. 'Women Characters in the Works by Two Zanzibarian Novelists', in 6 Swahili-Kolloquium, Bayreuth, May 14, 1993.
- Gabba, David. 1990. 'Women and Development: The Tanzanian Case', Culture and Development in Africa. S. H. Arnold & A. Nitecki.(eds.) Africa World Press, pp.315~324.
- James, Adeola.(ed.) 1990. 'Penina Muhando', In Their Own Voices. James Currey. pp.74~91.
- Mohamed, Said A. 1990. Tata za Asumini. Longman Kenya Ltd.
- Muhando, Penina. 1976. 'Talaka Si Mke Wangu.' Uandishi wa Tanzania I -michezo ya kuigiza. J. Mbonde.(ed.) East African Literature Bureau, pp.96~121.
- Ngozi, Ibrahim S. 1977. Machozi ya Mwanamke. Tanzania Publishing House.
- サーダウイ, ナワル・エル. 1987. 『0度の女—死刑囚フィルダス』(鳥居千代香訳). 三一書房.
- . 1988a. 『イヴの隠れた顔—アラブ世界の女たち—』(村上真弓訳). 未来社.
- . 1988b. 『神はナイルに死す』(鳥居千代香訳). 三一書房.
- . 1989. 『あるフェミニストの告白』(鳥居千代香訳). 未来社.
- . 1990. 『もうひとりの私』(奥田暁子訳). 学芸書林.
- . 1992. 『カナーティルの12人の女囚たち』(村上真弓訳). 未来社.
- . 1993. 『イマームの転落』(鳥居千代香訳). 草思社.